

# ふるさと再発見 第23回

## 井原西鶴の遺稿集に情景描写

### 新町通りに異彩を放つ大店本宅

# 旧伴庄右衛門家住宅

皆さんは、京街道と新町通りの交差点に面した旧伴家住宅をご存知でしょうか。旧伴家住宅は、市指定文化財である本家部分と小学校として利用されていた時に建てられた教室部分の建物で構成され、校庭の一部として利用されていた中庭も一部残っています。名前の通り伴庄右衛門家本家として建てられたこの建物は、窓をふんだんに取り入れ、屋内をなるべく明るくする工夫がされています。当時、防犯上、窓は極力少なくするのが一般的な商家の造りですが、1階の板間と2階の45畳の和室西側は、ほとんど腰窓となっていてます。なぜこれだけ窓が必要だったのでしょうか。江戸時代の戯作者・井原西鶴の遺稿集「西鶴織留」の中に、「八

幡では百人の女たちが蚊帳を縫っているところがある」という内容の記述があり、まさにこの様子は旧伴家以外ではありえない風景だと思われれます。旧伴家住宅なら百人近くが1階と2階に分かれれば十分に入れますし、裁縫もできる明りが採られています。特に2階の和室は、幅3間、奥行7間半の中に柱が1本もない大空間の畳間です。その上に7間半の梁が1本の松で作られており、これだけ大きな畳間は市内にはありません。また、江戸時代は天井の低い物置のような屋根裏の物置場を除き、2階建てが制限されていた中で、3階建ては特筆に値します。3階は、以前「地震の間」と呼ばれていましたが、どの資料にも地震の間という文字

は出てきません。元滋賀県立大教授の濱崎一志さんは新町通りの「自身番」が居たところではないかという仮説を出されています。梁や桁が縦横に巡らされているこの部屋の新町通り側に窓が付いており、ここから城下町のかなりの部分を見渡すことができ、見張るにはちょうど良い空間となっています。また、この部屋の柱や梁には、この建物に利用される以前の建物に利用されていた時の番付などの墨書きがされています。なぜ再利用の部材を多量に使用しているのでしょうか。濱崎さんは、「この建物を縁起の良い建物にしよう」と、隆盛していた店などの縁起の良い部材を積極的に集め再利用したのでは」と考えています。当時の伴家とすれば、いく



正面からみた旧伴家住宅



◀ 3階の「地震の間」

らでも新品かつ良品の部材が入手できるはずですから納得がいきます。要するに、この大きな部屋は、特に名前のある部屋ではなく、「自身番」が利用していた部屋を、後世の人々が、伴家が地震によって大破した後に作られた大きく堅牢な建物で梁や桁が必要以上に配置されていたことから地震に耐えられるように作ったのに違いないので、後年「地震の間」と呼ぶようになったのではないかというのが濱崎さんの意見で、そのように考えるのが合理的と思われる。

旧伴家住宅は、その後、女学校や図書館などに使用された時代を経て、現在は公益財団法人八幡教育会館が所有し一般公開を行っています。また、さまざまなイベントも開催されており、近江八幡の歴史や文化財に関することなどの講座なども行っております。ぜひ一度、旧伴家住宅にお越しください。

※江戸時代に市中警戒のために交替で務めた当番となる者



伴蒿溪 (1733-1806)  
伴庄右衛門家5代当主。八幡商人として家業に精励後、京都に隠棲し国学者として活躍し「近世畸人伝」などを著した。

新型コロナウイルス関連の情報は、市ホームページをご覧ください

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、本紙掲載の催しが急に中止や延期になる場合があります。開催の可否は事前に担当課または主催者へご確認ください。また、最新情報は、市のホームページ <https://www.city.omihachiman.lg.jp/> で随時発信しておりますので、ご確認をお願いします。

人口と世帯 令和2年10月1日現在 ( )は前月比

|    |          |       |
|----|----------|-------|
| 総数 | 82,223人  | (-12) |
| 男  | 40,410人  | (-14) |
| 女  | 41,813人  | (+2)  |
| 世帯 | 34,387世帯 | (+4)  |

※外国人住民(42カ国・地域/1,479人)を含みます。